

## 『灸古義』について

鶴田 泰平

日本鍼灸研究会

『灸古義』(写・上下2巻)は江戸後期の鍼医・石坂宗哲(1770-1841)の著した灸法書で、石坂流鍼術の創始者として鍼術について論じられることの多い宗哲の灸に関する知見を著した数少ない資料の一つである。本書は西尾市岩瀬文庫に所蔵されており、『灸古義』『鍼灸茗話』『九鍼十二原鈔説』の3書を「鍼灸書」として一括されているもののうちの1書である。『臨床鍼灸古典全書』第16巻(オリエント出版社)、『臨床実践鍼灸流儀書集成』第12冊(オリエント出版社)に影印所収されている。

宗哲は、名を永教、字は延玉、文和、号を竿斎と称した。杉山和一の鍼術を学んだ石坂志米一の孫(一説には子)とされており、寛政8年(1796)台命により、甲府勤番を命ぜられ、宇佐美通茂とともに甲府医学所を設立し、寛政12年に江戸へ戻った。宗哲は『素問』『靈樞』『難経』などの『内経』を研究し真義を明らかにすべきとの主張をして、伝統医学を重視しつつも、文政8年(1825)より、長崎の出島に滞在していたオランダの外科医・シーボルトとの交流により得られたオランダ医学の理論も取り入れた人体部位(骨格、蔵府など)の論説なども行った。主な著書として『鍼灸説約』『医源』『鍼灸知要一言』『灸古義』『骨経』などがある。

『灸古義』の内容と体裁は、上巻では『素問』(6篇)『靈樞』(8篇)『傷寒論』(12項目)『金匱要略』(3項目)を引用して、鍼法(主に火鍼、焼鍼、燔鍼)と灸法との理論上及び臨床上の関係などを含む、およそ36項目の灸に関する論を表し、処々を私論にて補完している。また、下巻では「可灸二十二法」「不可灸十法」により可灸穴と禁灸穴を述べ、続いて奇穴論を含む灸論を展開し、最後に『千金方』を中心に、『千金翼方』『資生経』『鍼灸大全』『奇効良方』など34の漢籍、和書の典拠より引用された、「四華穴」「患門穴」「十三鬼穴」「脚気八所穴」などを含む178法に及ぶ奇穴の穴位と主治病證が記されている。なお、宗哲の灸法に関する知見の集約となる上巻には、鍼灸治療に関して「古へ、燔鍼、焼鍼、火鍼の病、今は乃ち灸に宜し」「呼吸其の度を得、善く此の四海を知るは、乃ち邪気の在る所を審らかにすることを得。精神を調じ、營衛を明し、経絡、支絡、孫絡の尽く、其の谿谷の会、輸穴の在る所を知り、以て寒熱、虚実を調和す。虚するは之れを補い、実するは之を瀉す。病の逆順を明らかにすとは、乃ち治すべきと治さざるべきとを知り、精神の相い偶して奇ならざるを察すれば、乃ち病の起こるべくを知る。是れに因りて標、本を審らかにし、寒熱を察して、皮膚の寒温、滑濇を診て、邪の在る所を得れば、其の苦ある所を知るなり。左右、上下、虚実互いに興るは、乃ち鍼の宜しき所なり。若し左右、上下、皆な虚すは、乃ち灸の宜しき所なり」と按じ、また、江戸後期当時の灸治療における伝統医学理論の不足や、それによる治療の過誤を戒め、『内経』や張仲景の書に論ぜられる病理病證の理論を明らかにして、そこに立ち返り灸治療を行うべきであるとの言及が見られる。

今回の調査は、石坂宗哲の灸治療に対する論拠を考察することを目的として、『灸古義』の内容と典拠について調査した。